

信仰と実践

FAITH AND PRACTICE

2007年1月10日 第3号 第2版 編集・発行 関口 康

〒270-0021 千葉県松戸市小金原 7-20-8 ysekiguchi@nifty.com

翻 訳

A. A. ファン・ルーラー

「ウルトラ改革派とリベラル派」¹

(1)

関口 康訳

はじめに

1969年9月5日、私はルンテレンで開催されたオランダ改革主義学生会²の同窓会の会合で「家庭内戦争の終結」³という題の講演を行った。講演はオランダ国内の二つの改革派教会（Nederlandse Hervormde Kerk と Gereformeerde Kerken in Nederlands）の関係の問題、両教派の二十世紀以内の統合は不可避的であるという問題に及ぶものであった。その場合にいつも起こる問題の一つは、戒規（leertucht）の問題である。その関連で私は「改革派の右翼には異端が潜んでいる。彼らの横に立つとリベラル派の異端が兎戯に見える」という自説を、うっかり披瀝してしまった。この発言が短い解説付きで『教会と神学』の第21巻（1970年1月）7～8ページに掲載された⁴。それがなんとも派手で挑戦的な扱いだったので、『ヴァーペンフェルト』⁵ 編集部の関心を引くものとなった。同誌編集部が常に注目していたのは、同じような意見が『なぜ私

¹ A. A. van Ruler, Ultra-gereformeerden en vrijzinnig (1970), in: Theologisch werk (Th. W.), Deel 3, G. F. Callenbach N. V. -Nijkerk, 1971, p.98-163.

² Societas Studiosorum Reformatorum. 「S. S. R.」と略。

³ A. A. van Ruler, Het einde van een huishoudelijke twist, in: Th. W. Deel 2, 1971, p. 209-219.

⁴ Kerk en Theologie, XXI (Januari 1970), p.7-8.

⁵ Wapenveld. 「戦場」という意味。

は教会に通うのか』⁶ という私の本の 173 ページにも見られるということだった。そこに私は次の問いを書いた。「しかしわれわれは、罪深い人間存在についての純粋な教えをどこに見いだすのだろうか」。そして答えとして加えたのはこれである。「とにかくその教えを見いだせるのは改革派プロテスタンティズムの右翼のところではない!」。編集部が問いかけてくださったのは、この命題をもう少し詳しく言うとうどういうことになるのでしょうかということであった。それで思い至ったことは、この依頼に私は応えなければならないということであった。われわれは、このような言葉を思いつきで言ったまま放置することはできない。そういうやり方は、軽率な当てこすりのように思われてしまう。またわれわれは自分自身を一つの思想世界へと結びつけることをしないで、こういう言葉を語ってはならない。われわれがそれと認めるすべての異端を一列に並べてみることは、よいことである。それが透明性に仕えるやり方である。

とはいえ、われわれが愛する霊的潮流についてこれほど悪く言わなければならないのは悲しいことである。改革派信仰は最も美しく最も豊かな公同的キリスト教の形態である。ウルトラ改革派は改革派的クオリティのすべてを備えている。私はウルトラ改革派の人々もそうであると考えている。彼らは私の最愛の人々なのである。彼らは実存の深みを比類なき仕方で味わっている。典型的な実存主義者などは彼らに比べればブルジョア人間のサロンの体験主義にすぎない。ウルトラ改革派は真面目に生きているのである。そのことについては深い尊敬の念を持たなければならないのである。彼らはすべてを絶対的な口調で語る。その点で彼らはパスカルやキルケゴールに似ているのである。彼らの最も重要な代表者たちが示す誠実さと心の広さ、その幅広い、あらゆるものを包容する寛大さは、感動なくして見るができないものである。

それゆえ、私は、ウルトラ改革派を賛美する歌をいつまでも歌いつづけることさえできる。しかしそれは、今私が果たすべき務めではない。私は彼らの異端性について語らねばならない。彼らの凄まじい異端性についてである。彼らに比べればリベラル派の異端はまるで子供の遊びである。数年前、私は改革派牧師会の会合で「体験主義の光の面と影の面」⁷ という題の講演を行った（『教会と神学』、第 5 巻、1954 年、131～147 ページに掲載）。その仕事をやり遂げた後に強く感じたことは、光の面が非常に鮮明に浮かび上がってきたということと、影の面がまさに一面的に影の中にとどまり続けているということであった。しかし今それを修正したい。私は今、体験主義の中にある一定の影の面だけではなく、ウルトラ改革派の体験主義の中にある一定の異端を指し示すことに、より明瞭に自己限定したいのである。われわれはこの最も重要な

⁶ A. A. van Ruler, *Waarom zou ik naar de kerk gaan?* G. F. Callenbach N. V. -Nijkerk, 1971.

⁷ A. A. van Ruler, *Licht- en schaduwzijden in de bevindelijkheid*, in: Th. W. Deel 3, p. 82-97.

霊的潮流の無価値な面〔onwaarden〕（影の面）だけでなく、（あまりにもひどい）虚偽の面〔onwaarheden〕（異端）をも持っているのである。

しかし、私は何も異端狩りをしたいわけではない。1969年9月の講演において私が注意を向けさせたのは、次のことにすぎなかった。すなわち、われわれが戒規を開始するときには、左側の異端のことだけでなく右側の異端のことについても考えねばならないということ。しかしそのとき大切な体を切りつけられるかもしれない恐怖におそわれるということ。われわれはこのことを考慮して戒規の問題について考えるのを遠慮している面もある、と述べたにすぎなかったのである。

とはいえ、「異端」について語ることは時代遅れなのだろうか。すべてが等しく真実だろうか。そもそも真理が問題になっているのだろうか。われわれは互いに愛し合うべきではないのだろうか。教会的に翻訳しなおすならば、われわれはエキュメニカルな開かれた態度と団結心とをもって共に生きるべきではないのだろうか。そのことをわれわれは今では至るところで耳にする。その際に注目すべきことは、右翼の人々のモチーフや内容に則って語りたがる人々、とくに（教会的・神学的意味の）ウルトラ右翼の人々のモチーフと内容に則って語りたがる人々は、珍しいほどにほんのわずかし開かれた態度を持ち合わせていない、ということである。彼らはそのような感覚器官を持ち合わせていない。彼らはどこに問題があるのかということ全く理解さえていないのである。われわれはオランダ改革派教会（Nederlandse Hervormde Kerk）の中で改革派同盟（Gereformeerde Bond）に反対する中道正統派（midden-orthodoxen）の態度を目の当たりにしている。これはもっと恥ずべきことを犯している。ウルトラ改革派の異端たちがあまり大げさに語らないことには理由がある。彼らはあまりにも埋もれた〔人目につかないために見落とされる〕グループを形成しているからである。われわれは「黒靴下教会」（zwarte-kousen-gemeente）を、ただ単に笑い者にするか、軽蔑し、厳しく裁くだけである。

しかし私は、この考察を、また問いかけられたことについて説明することを、思いとどまるわけには行かない。真理とは一事か万事かというようなものではありえない（真実は重要であり、また真実こそが事実である！）。とはいえ、われわれがすることは彼らに大量の散弾を放つことでもありえない。われわれは彼らと闘い続けるべきである。もはや真理問題を持ち出すべきでないというなら、すべてのエキュメニカルな仕事はむなしなものになる。真理問題を正しく持ち出すならば、そのときわれわれは異端を宣告し、譴責する勇気をも持たなければならない。まさにそのとき、われわれは本来的な事柄に取り組むのである。それは愛である。少なくとも福音とキリスト教信仰の意味での愛である。

（次号に続く）

広 告

○「ファン・ルーラー研究会」からのお知らせ

「ファン・ルーラー研究会」（代表 関口 康）は、20 世紀のオランダ改革派教会の「三大」神学者の一人と称される、アーノルト・A. ファン・ルーラー [1908～1970] の著作（オランダ語）を読みながら、今日の教会と社会の問題を考える会です。将来はどこかの会場に集まっての講読会を行いたいと願っていますが、現在はメーリングリストでのやりとりが主たる活動です。

「ファン・ルーラー研究会」は、会員を募集中です。ぜひご参加くださいますようお願いいたします。詳しくは、研究会ホームページ (<http://vanruler.protestant.jp>) を御覧ください。入会希望・意見・質問等は ysekiguchi@nifty.com（関口 康）までお寄せください。

○「アジア・カルヴァン学会」からのお知らせ

「アジア・カルヴァン学会」（日本支部代表 野村 信）は、「国際カルヴァン学会」の一枝として、16 世紀の宗教改革者ジャン・カルヴァンの翻訳と研究を行う学会です。定期的に「カルヴァン翻訳会」を開催し、地道な翻訳活動を続けています。2006 年には本学会の翻訳・編集による『カルヴァン説教集』（キリスト新聞社）の第一巻が出版され、多くの識者からの好評を集めています。また本学会は 2007 年 8 月に東京で開催される「第 10 回アジア・カルヴァン学会日本大会」の開催実行委員会としての役割も担っています。

「アジア・カルヴァン学会」は会員を募集中です。ぜひともご参加くださいますよう、お願いいたします。詳しくは、学会公式ホームページ (<http://society.protestant.jp>) を御覧ください。また入会希望・意見・質問等は Sno2999@aol.com（野村 信）までお寄せください。